

『日本童話宝玉集』に再話された日本の神話

市瀬 雅之

はじめに

一九二〇年代に、児童文学として再話された日本の神話といえ、鈴木三重吉の『古事記物語』上巻(1)が知られる。『古事記』のみを再話するという主張は、当時、必ずしも一般的ではなかった(2)。一九三〇年代に刊行された、大木雄二の『日本神話』を開くと、『古事記』に『日本書紀』や『風土記』を組み合わせた再話が展開されている(3)。一九五〇年代には、『世界少年少女文学全集』に収められた林房雄の「古事記物語」が、鈴木『古事記物語』を優れたものと認め、同名の作品を発表しているが、『日本書紀』等を含み込んでいる。再話が作者の力に寄るところが大きいことに鑑みると、古典作品の個々が参照されるばかりではなく、児童文学として展開された再話作品に影響を受けている可能性が認められる(4)。

一九六〇年代に、松谷みよ子が再話した『日本の神話』には、『古事記』を中心に『日本書紀』や『風土記』等ばかりでなく、民話やユークラマダが積極的に組み合わせられている。児童文学作品として再話された日本の神話には、出典となる古典を一つに絞らない個性豊かな物語世界が展開されている。

本稿は、楠山正雄(5)が編んだ『日本童話宝玉集』(以下「当該書」と呼ぶ)に着目し、大正期における日本の神話の再話の在り方を確認しておく。

同書は、

①『日本童話宝玉集』上巻 富山房 一九二一年(大正十)十二月

②『日本童話宝玉集』模範家庭文庫 巨人版 富山房 一九三八年(昭和

十三)十二月

③『新版日本童話宝玉集』童話春秋社 上一九四八年(昭和二十三)十二月・中一九四九年(昭和二十四)一月・下同年六月

④『日本童話宝玉集(二)』『日本の神話と十大昔話』講談社 一九八三年五月(昭和五十八)

と、繰り返し刊行されている(6)。太平洋戦争をまたいだ昭和期の享受の変化までを確認しておく。

一、編集の特徴

一九二一年(大正十)に刊行された当該書①の「おぼえがき」には、刊行の事情が、

『世界童話宝玉集』を出してから、ちやうどまる二年めに、その姉篇として書かれたこの『日本童話宝玉集』の上下二巻が出ることになりました。

と記されはじめる。世界の童話が日本語に翻訳された先に、日本の童話が顧みられている。集められているのは、

この本はむろん、専門の伝説学者が、めづらしい文献の中から、またきれぎれ口碑の中から、忘れられ、埋もれてゐた説話を新しく掘りおこして来たといふやうなものではありません。日本の国に生れた何人もが子供の時から聞いて知つてゐる筈のごくありふれた、しかしあくまで国土の情味のゆたかな説話を、神話、伝説、童話のいろいろの方面に互つて、百種ほどえらび出して、それをこころみに、わたくし

一人の心持でとりまとめて書いて見たものにすぎません。ただ、これだけの中味と形をととのへた説話集すら、まだ一つもできてゐなかつたことを思へば、わたくしのこのしごと、むだではないと思はれます。

と、「子供の時から聞いて知つてゐる筈のごくありふれた、しかしあくまで国土の情味のゆたかな説話」が、数多く蒐集・整理されたところに刊行の意義が示される。その中に、神話も含まれている。そこには、

かういふわけで、この本はしひて新しい、めづらしい話を書かうとしたものではありませんが、しぜん、数多い中にはこれまで誰の手にも書かれなかつた話も可なりにあると思ひます。しかしわたくしの一ばん苦しんだのは、やはり、これまで一種の型で語りつたへられて来た古い説話に、できるだけ自由な、新しい表現を与へることでした。そのためにも、一つの話をいろいろに書きかへても見ました。その合間には、ほかにも、機会のあるごとに、いくつかのかはつた形式の童話を書いて見ました。みなこの二冊の本を書き上げるまでの準備であつたのです。

と、「これまで誰の手にも書かれなかつた話も可なりにある」との自負が垣間見え、「一種の型で語りつたへられて来た古い説話」には、「できるだけ自由な、新しい表現を与へること」が求められている。古典に記された内容を通釈することより、子どもたちにわかりやすく、面白い話として提供されることが優先されている。

集められた話は、

むろん厳しい学問上の分類ではありませんが、便宜のため、上下の二巻を三つづつの部門に分けて、上巻に、神話と、英雄伝説と、諸国物語、下巻に、十大昔ばなしと、文芸童話と、諸国童話といふ風にして、上下のおのおの、五十篇づつの説話をのせました。耳づいてゐる一一の説話に解説の必要はないと思つて、こんどは省きました。上巻の中で、神話は、

日本書紀を主に、古事記、風土記、古語拾遺以下の古典を副に立てて、できるだけ多くの説話群を綜説しました。そのうち一二、殊に民話的要素の多い大國主命と海神の宮に關した伝説圏のやうな、全く古事記のみによつて書いたものもあります。

英雄伝説と諸国物語は、話題の奥を古い文献から得て来たのはいふまでもありませんが、現代作家の新しい童話伝説集から、かはつた材料と、おもしろい話の組立の工夫を得たものもすくなくはありません。と、整理されている。

神話の内容については、「日本書紀」を主に編んだと記すところに大きな特徴が見出される。「古事記」は和語で記され読みやすく、すべてを讀んでも三巻と短い。これに比較して、『日本書紀』は三十巻もあり、神話だけでも二巻が存在する。正文には複数の一書が併記され、読み通すのが難しい。「できるだけ多くの説話群を綜説しました」と記されてはいるが、内容への確認が求められる。

二、『日本書紀』を主にした再話

当該書①「上の巻見出」には、「第一部神話」が次のように目次立てられている。

一 世界の誕生

一 世界の初、 人間の初 二日と月 三火の神

二 夜見の国

一 鬼の群 二人間の命

三 闇と光

一 だだ泣き 二 誓ひ 三天の斑駒 四天の岩屋 五 罰

四 素戔鳴命

一 八岐の大蛇 二 国引き 三 樹の種

五大国主命とその兄弟

一白兔 二赤い猪

六大国主命と素戔鳴尊

一蛇と百足 二鼠 三椋の実と赤土

七曙の国

一八千矛の神 二小さい神さま 三賭 四粟の穂 五奇魂幸魂

八神神のたそがれ

一天若彦 二雉のお使ひ 三鳥の会葬 四お国ゆづり

九日の御子

一猿田彦 二もろい花

一〇海幸山幸

一海のお宮 満潮の珠干潮の珠 三海への産屋

「一世界の誕生」の冒頭「一世界の初、」は、次のようにはじまる。

むかしむかし大昔、神さまもまだお生まれにならない遠い遠い昔のことでした。

その時世界は果てしもなく大きくなりやみでした。そのくらやみは、目も鼻もない、ぶよぶよした大きなかたまりのまま、とろりとろりと、油が浮いてあるやうに空の中に浮いてみました。でもその中にはもう、いろいろの生きものの種が、かすかに芽をふきかけてみました。

『日本書紀』第一段正文が、

古に天地未だ割れず、陰陽分れず、渾沌にして鶏子の如く、溟滓にして牙を含めり。其の清陽なる者は、薄靡きて天と為り、重濁まる者は、淹滞りて地に為るに及びて、精妙の合搏すること易く、重濁の凝竭すること難し。故、天先づ成りて地後に定まる。然して後に神聖其の中に生れり。

とはじまるのに比較すると、通釈することより、昔話のように親しみやすく

書き改められている。「油が浮いてあるやうに」との記述は、『古事記』に、

天地初めて発れし時、高天原に成りし神の名は、天之御中主神。次に、高御産巢日神。次に、神産巢日神。此の三柱の神は、並に独神と

成り坐して、身を隠しき。

次に、国稚く浮ける脂の如くして、くらげなすただよへる時、葦牙の如く萌え騰れる物に因りて成りし神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲神。

(以下略)

と、傍線部が想起されるが、『日本書紀』神代上第一段一書第二にも、

一書に曰く、古に国稚く地稚かりし時に、譬へば浮べる膏の猶くにして漂蕩へり。時に国の中に物生れり。状葦牙の抽け出でたるが如し、此に因りて化生づる神有り。(以下略)

と認められる。後者を利用している場合、『日本書紀』の正文と一書には区別が認められない。

「二日と月」が、

(前略)河の神、海の神、野の神、山の神、それから草や木の神も生れました。伊弉諾の神はその時女神に向つて、

「大八島の国も生んだし、山も川も草も木もみんな生んで、まづこれ世界の形ができた。こんどはこの世界の王さまになる人をうまなければならぬ。」

とおつしやつて、日の神さまをお生みになりました。この神さまがお生れになると、目の眩むやうな貴い光がかつと射して、忽ち世の中が明るく照りわたりました。おふた親の神さまもびつくりなさりながら、嬉しさうに手をうつつ、

「たくさんの子供を生んだ中でも、これほど不思議な神神しい子は生まれなかつた。地の上に置くのは勿体ない。早く天へ送つて、高天原の主にしよう。」

おつしやいました。そして天と地の間に立つてゐる天の御柱を伝はつて、天へお送り上げになりました。その時分は、天と地の間がそれほど近かつたのでした。

この日の神は女の神さまで、お名は大日靈貴、また天照大神と申し上げて、永く光明と慈愛の神さまとお仰がれになる方でございます。

火の神の次には男の神さまの月夜見の神がお生れになりました。この神さまの光は姉神ほどではありませんでしたが、でも、その静かなやさしい光は、世界中の生きものに、休みと眠をさづけるお力がありましたので、この方も姉神の後から天へ送られました。

と記す内容は、『日本書紀』神代上第五段正文に記された、

次に海を生む。次に川を生む。次に山を生む。次に木の祖句句

廼馳を生む。次に草の祖草野姫を生む。亦是野槌と名す。既にして伊奘諾尊・伊奘冉尊共に議りて曰はく、「吾己に大八洲国と山川草木とを生めり。何ぞ天下の主者を生まざらむ」とのたまふ。是に共に日神を生みたまふ。大日靈貴と号す。大日靈貴、此には於保比屢咩能武智と云ふ。靈、音は力丁反。一書に云はく、天照大神といふ。一書に云はく、天照大日靈尊といふ。此の子光華明彩しく、六合の内に照り徹る。故、二神喜びて曰はく、「吾が息多しと雖も、未だ此の若く靈異しき児有らず。久しく此の国に留むべからず。自当に早く天に送りて、授くるに天上の事を以ちてすべし」とのたまふ。是の時に、天地相去ること未だ遠からず。故、天柱を以ちて、天上に挙げまつりたまふ。次に月神を生みたまふ。一書に云はく、月弓尊、月夜見尊、月読尊といふ。其の光彩日に垂げり。以ちて日に配べて治らすべし。故、亦天に送りたまふ。

(以下略)

が再話されている。『古事記』では、「是に、左の御目を洗ひし時に、成れる神の名は、天照大神。」とのみ記されている内容が、『日本書紀』には、

「是に共に日神を生みたまふ。大日靈貴と号す」と、太陽神であることが示されている。『古事記』には「次に右の御目を洗ひし時に、成れる神の名は、月読命」とのみ記される内容も、『日本書紀』は、

次に月神を生みたまふ。一書に云はく、月弓尊、月夜見尊、月読尊といふ。其の光彩日に垂げり。以ちて日に配べて治らすべし

と、月の神であることを明らかにしている。それだけではなく、

さて、これはその後のお話でございます。或時この神さまは姉神のおいひつけで、下界に住む保食の神の所へ、お使においでになりました。

(以下略)

と続く内容には、天照大神に遣わされた月夜見の神が、保食の神を殺し、天照大神が怒って月夜見の神と昼夜を分かつことになった由縁が記されている。死んだ保食の神の体からは、五穀の種が採取されたという起源も記されている。これらの内容も『日本書紀』神代上第五段一書第十一に見出すことができる。『日本書紀』の正文に一書が組み合わされることで、神の本質や物語の内容がわかりやすく、豊かになるように記されている。

「二夜見の国 一鬼の群 二人間の命」は、『日本書紀』の正文に含み得ない内容なのだが、第五段一書第六十を参考にすると、『古事記』が記す黄泉国神話に相当する内容を記すことができる。伊奘冉尊に「神退去り」をさせることで、人の生死の起源までが表されている。

「四素浅鳴命」に着目すると、出雲国に降り立った素浅鳴尊が、八岐の大蛇を退治する際に娶る女性の名を「櫛稲田比売」と表し「くしなだひめ」と訓んでいることが留意される。『古事記』は「櫛名田比売」（くしなだひめ）と記し、『日本書紀』は、

「奇稲田姫（くしいなだひめ）」

正文・一書第三

「稲田姫（いなだひめ）」

一書第一

「真髪触奇稲田姫（まがみふるくしいなだひめ）」

一書第二

と記す。二書の表記と訓が入り交じっている様子がうかがわれる。

足摩乳に何者かを尋ねられると、

「はッはッは、これはわたしが悪かった。大空から降つたわたしは神の子だ。天照大神の弟だ。」

と答えているところには、『古事記』が、

「吾は、天照大御神のいろせぞ。故、今天より降り坐しぬ」

と記す内容と一致する。そうした中にあつても、アマテラスオオミカミを『古事記』のように「天照大御神」とは記さず、「天照大神」と記している。アシナヅチを『古事記』のように「足名椎」とは表記しないで、「足摩乳」と書き表している。大蛇の腹から出てきた剣を、『古事記』のように「爾くして、怪しと思ひ、御刀の前を以て刺し割きて見れば、つむ羽の大刀在り」とは記さず、『日本書紀』神代上第八段正文が、

(前略) 此所謂草薙剣なり。草薙剣、此には俱婆那伎能都留伎と云ふ。一書に云はく、本の名は天叢雲剣。蓋し大蛇居る上に、常に雲氣有り。故以ちて、名くるか。日本武皇子に至りて、名を改めて草薙剣と曰ふといふ。(後略)

と記すように、「これが天の叢雲剣、後に草薙の剣」とある。作者の『日本書紀』を主とする再話姿勢が認められる。

前掲した「おぼえがき」には、「殊に民話的要素の多い大国主命と海神の宮に関する伝説圏のやうな、全く古事記のみによつて書いたものもあります」とある。『日本書紀』に『古事記』を組み合わせて再構成することで、話題を幅広く読むことができるように記されている。

「二国引き」には、『出雲国風土記』意宇郡条の地名起源説話をを用いて、海の向こうから国が引き寄せられると、「三樹の種」には、更に海を渡る事が目指されている。船材として、素戔嗚尊が杉や檜を増やす話は、『日本書紀』の神代上第八段一書第五に、

一書に曰はく、素戔嗚尊の曰はく、「韓郷の島は、是、金銀有り。若

使吾が児の御らす国に、浮宝有らずは、是佳からじ」とのたまひふ。乃ち鬚髯を抜き散ちたまへば、杉に成る。又胸毛を抜き散ちたまへば、是檜に成る。尻毛は是椴に成る。眉毛は是櫟樟に成る。已にして其の用ふるべきを定めたまひて、乃ち称へて曰はく、「杉と櫟樟と、此の両樹は、以ちて浮宝にすべし。檜は、以ちて瑞宮の材にすべし。椴は、以ちて顕見蒼生の奥津棄戸に將ち臥さむ具にすべし。夫れ噉ふべき八十木種は、皆能く播きし生つ」とのたまふ。(以下略)

と記す内容が再話されている。

「七曙の国」の「三賭」には、『播磨国風土記』神前郡の望岡里条から、大国主命と少彦名命のがまん比べの話が引用されている。役割を終えた少彦名命が帰る姿を、『古事記』は、

(前略) 故爾より、大穴牟遲と少彦名と二柱の神、相並に此の国を作り堅めき。然くして後は、其の少名毘古那神は、常世国に度りき。

とのみ記すのを、「四粟の穂」は、『伊予国風土記』逸文「温泉条」を利用して、

伊予の国に道後といふむかしから名高い温泉があります。或時大国主命と少彦名命とがここへお出でになつた時、退屈まぎれに二人で角力をおとりになりました。

すると取り組んで転ぶ拍子に、どこか打ちどころでもわるかつたと見えて、少彦名命は気絶してお倒れになりました。大国主命はびつくりして、近所の山の中から流れ出してゐる温泉へ命をつれて行つて、じつとお湯に体を浸けておきますと、しばらくしてふと夢からさめたやうに、少彦名命は目をぱつちりとおあきになつて、しやんしやんお歩き出しになりました。それからこの温泉の利きめが世の中に名高くなつただといふことです。

と、大国主命と少彦名命による道後温泉の誕生を表す。その後、少彦名命が

粟の茎にはじかれて常世へ去って行ったことを、『日本書紀』神代上第八段一書第六を参考に記している。「五奇魂幸魂」でも、海の向こうからやって来た神を『古事記』は「この時、海面を光り輝かせて近づいてくる神がいました」とのみ記すが、「わたしはあなたの奇魂幸魂の神です」と表すところに『日本書紀』神代上第八段一書第六の利用が認められる。

当該書①には、『日本書紀』が記す正文と一書を区別なく再構成することで、神の本質や物語の経緯を、具体的に再話する姿勢が認められる。『古事記』とは内容の異なる、独自の神話世界が形成されているところに大きな特徴を見出すことができよう。

三、神話の別冊化

一九三八年〔昭和十三年〕に刊行された当該書②を開くと、当該書①に目次立てられていた日本の神話は含まれていない。「ふたたび、『日本童話宝玉集』を改版して出すについて」には、別冊の刊行予定が記されている。『日本神話英雄譚宝玉集』1（天の浮橋）（7）がこれに相当する。

「『日本神話英雄譚宝玉集』のはじめに」には、

「日本神話英雄譚宝玉集」といふ、たいへん長たらしい表題をもつこの列冊を、わたくしは、べつにあらはした『日本童話宝玉集』の姉妹篇として、皆さんのためにつくりました。（以下略）

とある。別に刊行された意図が問われよう。

「皆さん」に向かって、

さてこれは、いつもの、たれといふとなくつたへた「昔話」、またはどこのたれかの作った「お話」ではありません。皆さんのうまれたこの日本の国のそも／＼のはじまりから、昭和十六年のたつた今まで、それこそ二千六百一年も、いや、それよりももっと、もつと、ふるくから、長い、長い時代、国がつづいて来た間におこつた、ほんたうのお話です。

いつもの「お話」のやうに、おもしろいことばかりや、かなしいことばかりではない代りに、日本人としてたれも知つてゐなければならぬ、わたしたちのご先祖の、ほんたうにして来たこと、考へて来たことを、そのとほりにかいたお話です。その一つ／＼が、皆さんの心に深くしみのお話です。皆さんの胸に高い音を立てるお話です。

と、掲載する内容が、誰かが伝えた「昔話」でも、誰かが作った「お話」でもないという。「ほんたうのお話」であると位置づけられている。

大昔からの人間の世界にほんたうにあつたお話をかいたものを「歴史」といひます。そこで、日本の国の歴史が日本歴史です。学校では「国史」といつてゐるでせう。それは日本国の歴史といふのを略していつたままで、どちらもおなじことです。

と、「歴史」であるとす。その理解は、

皆さんが今に大きくなつて、世の中に出て、りつぱな人になつたとき、一たい自分は子供のとき、どんな子であつたのかしら。どんな事をして、そだつて来たのかしら、学問や、技術や、そのほかの世の中のいろんなことを、どんな風にしておぼえて来たのかしら、思い出してみたくなるでせう。思ひ出しても思ひ出しきれなくなると、きやうだいやお友だちにきいてでも、それを知りたくなるでせう。それから自分のことだけではない、おとうさまやおかあさまのことも、おぢいさまからひいおぢいさま、そのまたせん、ずつとふるいご先祖のことも知りたくなるでせう。

「たれか、うちの歴史を書いておいてくれるとよかつたなあ。」
かうたれも思ふことがあるでせう。

ご先祖のことも、自分のことでも、古いことを思ひ出してみるといふことは、善いことにせよ、わるいことにせよ、皆さんのこれから先の自分の一生の、戒めにも力にもなることです。

と、良くも悪くも自身のためになるという。それは個人や家族だけの問題に終わらない。

これは一人の家のことだけではありません。わたしたちが大勢あつまつてゐる。「国民」といふかたまりが、「国家」といふ大きな家をつくつてゐるばあひでも同様です。国家に大事件がおこつたとき、国民全体が一つになつて、それこそ世界ぢゆうの人が目をみはるやうなえらいしごとをしまふ。たとえば今、満州事変や支那事変で、日本の兵隊が、何年もの間、辛抱ぶよく、人間わざとおもわれない目ざましい働きを、それからそれとしつづけてゐます。それをみて、世界ぢゆうの人も、むろん目を見はるばかりでなく、日本人同志やはりびつくりしています。

「ぼくたちのなかまは、一体、むかしからこんなにえらかつたのかしら。」
 こんなことをいまさらのやうに思い出してみます。昔の事がなつかしくなつて来ます。ついわすれられてゐた「むかしのお話」が生きかえつて来ます。さうして生きかえつた「むかしのお話」が、わたしたちを感動させ、わたしたちを力づけてくれます、

これが「歴史」のはじまりです。
 と、身近なできごとを交えながら、「むかしのお話」が国家の「歴史」のはじまりになつてゐると説く。

古い、りつばな「歴史」ほど、新しい血にも肉にもなつて、その国民を若返らせませす。ですから、ばかでも何も考へない野蛮人には、「歴史」はありません。文明人でも、あまり新しい国には、「歴史」はありません。歴史はあつても、それは毎日の新聞をよむのと大してかほりのない、生々しいことか、かんさう無味なことばかりです。古い国でも、国民がなまけもので、何もしない国には、歴史はありません。

と、歴史が国民の行為とも結びついてゐるという。
 「ところで、私たちの日本の国はどうでせう」と、具体的な目が向けられる。

それは世界で一ばん古い国の一つといふだけではなく、神武天皇の御即位から数へても、二千六百年、その間に百二十四代の天皇を陛下と仰ぐ、これこそまつたく、世界のどこにも類の無いりつばな歴史を持つ国であります。この長い年月、代々お一人の陛下の御稜威の下に万民がよりあつまつて、その国をよくするために、一日も休まずはたらいて来た歴史を持つ国であります。

と、初代神武天皇にはじまり、歴代の天皇のもとで勤勉に働く国民性が讃えられる。

他国の歴史を取り上げながら、
 (前略) 我国の皇室はいふまでもなく、たた一すぢ、天照大神の御血統がつづいてゐるといふほかに、ことさら姓をお定めになる必要がないのです。

万世一系の天皇をいただく我が国体のたふとさは、そのままに国史のたふとさであります。

と強調されている。こうした考え方に基づいて、

さういふわけで、国史はいはば、とほひ神代に、天照大神の大御詔をうけてこの方、代々の天皇がこの日本の国を治めておいでになつた物語だと申してもよいのです。でも、二千六百年もの長い年月の間には、たえず世の中のうつり変りがあり、外国の影響などもあつて、天皇が御みづから政治をなさつたこともあり、臣下のうちのあるものにしばらく政治をおあづけになつたこともあり、その間、天皇のおほしめしどほりに政治の行はれたこともあり、お志の十分のびなかつたこともあり。ただいかほどみだれた世になつても、天皇のた

ふとさだけはどんなあばれものでもよくわきまへてゐて、かりにも「朝敵」とよばれることを、死ぬよりつらがつてゐたことは、これも国史をよんで知るたふとさであります。

と、天皇を中心とする歴史を「国史」と讃える。

前掲の当該書①に、「子供の時から聞いて知つてゐる筈のごくありふれた、しかしあくまで国土の情味のゆたかな説話」と示された理解から大きく離れ、「国史」と位置づけたところに、別冊化された理由がみえてくる。

別冊の企画が、一九三八年（昭和十三年）には予告されていることに鑑みると、この頃から、神話の理解が変化する社会の兆しを見て取ることができよう。

四、大きく省かれた神話

一九四八年（昭和二十三年）に刊行された当該書③に、『日本神話英雄譚宝玉集』1（天の浮橋）として別冊化された神話が、再び目次立てられることはなかった。「三たび『日本童話宝玉集』の版を改めるについて」には、その経緯が次のように記される。

大正十年から十一年にわたつたさいしょの『日本童話宝玉集』（上二巻）につづき、昭和十二年の改訂された『巨人版』（一巻）を経て、ここに三たび、書きかえられた新版（三巻）を出すことになりました。このあいだに、いつかじつに三十年ちかい年月が、しかも、わたくしたちの祖先の方、たれも知らなかった、はげしい苦難と体験のあらしと波のなかに流れて行きました。

とある。「わたくしたちの祖先の方、たれも知らなかった、はげしい苦難と体験のあらしと波」を象徴するのは、太平洋戦争に象徴される社会の変化であろう。

はじめて、わたくしのこの本の初刷を手にしたこのころの少年少女

諸君と、いま、この三たび改装された新刷本をあたらされる、新日本国の少年少女諸君とをわかつ、時代と境遇のあまりにはなほだしいかわり方をおもうと、まことに感じつきないものがございます。

とある。当該書①には、「ごくありふれた、しかしあくまで国土の情味のゆたかな説話」と記されていた神話が、大きく省かれている。

こんどの新版には、旧版二度の手入でもまだ不満足のままのこされた箇所を、あらためて見なおした上、一一の話篇に筆を加えました。あたらしく書き下したのも大小とりまぜて四十篇以上ののぼります。第一類の昔話集と、第二類の物語集と、あたらしく立てたこの大きなふたつの部門のなかに、旧版とちがつたくみ立てと分け方をこころみてもみました。すべてで一百一話、あたらしく加えたもののなかに、新版のための新作と、旧版の書きあらためたものとありますが、通じて、改削の手のまつたくはいらぬものはただ一篇もありません。

と、すべてが書き改められていることが強調されている。とりわけ神話については、

物語集のなかには、神話または英雄譚とよばれるもののうち、歴史はなれて、ほとんどまつたく国民伝説になつたものをも幾篇かまじえました。

とのみ記され、「国史」とされた神話が問い直されるまでには至らない。昔話集のうちにも、なかば伝説のさかいに入りかけたものもあります。そのほかに、ささいな民話、笑話のたぐいをもいくつか補い入れました。なおまた序話に、日本の童話のせいしつとなりたちを、なるべくやさしくかいてみました。一一のお話の出所そのほかのことは、とりまとして、第三巻のおわりにかきのせることにしました。

とある。

神話は、第三冊目次に「物語集一（しよこく物語 上）二十話」と記され

る中に、「八またのおろち」「いなばのしろうさぎ」「海さち山さち」のみが記された。巻末に記された「お話についてのおぼえがき」にはその位置づけが次のように記されている。

六六 八またのおろち

古事記上・日本書紀一神代上に名だかい英雄神話で（いわゆる出雲神話）であるが、それよりも出雲そのほかの山陰諸国に関して語られる民俗伝説群の先頭に立つものとしていみがある。生贄の少女の救助を契機とする怪妖退治譚に、宝剣、和歌、地名の地名説話がからんでいる（天叢雲または草薙剣、八雲立つの歌、出雲と須賀の地名）。この物語がのちの酒願童子物語や、猿神退治物語へ発展した。酒願童子が越後から出て来たとする後の伝説も、ここの古事記の「高志（越）の八俣遠呂知」につながるものである。

六七 いなばのしろうさぎ

オオクニノヌシ伝説は、いわゆる出雲神話の根幹とされているが、これも、前の「八またのおろち」物語を承けた、山陰諸国の地方伝説群とみたい。それは、古事記上・日本書紀一神代上、古語拾遺など神道史関係のもののほか、出雲そのほか諸国の風土記その文献をもつのもわかる。平和な人文関係の英雄伝説であるところにも、ことにその特色がある。（以下略）

六八 海さち山さち

古事記上、ホテリノミコト（海佐知毘古）とホオリノミコト（山佐知毘古）兄弟の海さち（魚釣鉤獲物）山さち（獵弓矢獲物）交換に起る葛藤が三年の遊行（海神の宮）のち、父神とその娘トヨタマヒメの援助と、塩盈珠・塩乾珠の如意宝珠の呪力とで、弟の勝利に終って解ける。日本書紀二神代下には一そう精しく八種の異伝をのせ、ミコトの名もホノソリ、ヒコホホデミとし、なお少異がある。のちの浦島式龍宮物語の根源。ただし兄弟のミコトの名はいずれも仮託で、ひろく太平洋諸島の原始民

族に流布する兄弟・海陸の争闘譚に、中国ふうの神仙卿淹留の説話が結びつき、わが神代の物語の一部となったものであろう。

いずれも、地方の物語や伝説としての視点からの採用と考察が記されている。

当該書③が記す神話への理解は、ここに最小限が構成されている。歴史と直接関わらない神話部分のみを採録することが、神話を残す方法として選択されているといってもよからう。

おわりに

一九二一年（大正十）に刊行された当該書①は、神話が『日本書紀』を主に再話されているところに大きな特徴を認めることができる。『古事記』にしか記されない話はともかく、『日本書紀』の正文に多くの一書を、区別することなく組み合わせ、再構成することで、神の本質や物語の展開を豊かに表現することが志向されていた。鈴木三重吉の『古事記物語』が前年に刊行されていることに留意すると、『日本書紀』を中心とする再話が異なる神話世界を提示する。

一九三八年（昭和十三）に刊行された当該書②からは、神話が切り離され、一九四二年（昭和十七）に別冊として、『日本神話英雄譚宝玉集』¹（天の浮橋）が刊行されていた。神話が「国史」と位置づけられたことによる。当該書②が刊行された一九三八年（昭和十三）頃には、神話理解に大きな変化のあった様子をうかがわせている（8）。

一九四八年（昭和二十三）に刊行された当該書③に残された神話は、歴史から切り離された「八またのおろち」「いなばのしろうさぎ」「海さち山さち」のみが掲載された。「国史」とされた多くの神話を捉え直す余裕は認められない。不掲載には、社会に忌避されていた空気さえ感じられる。

日本の神話が再び見直されようになるのは、一九五〇年代に世界の名作童

話が全集化されてゆく中のこととなる(9)。

注

- (1) 鈴木三重吉『古事記物語 上巻』赤い鳥の本第一冊 赤い鳥社 一九二〇年〔大正九〕十一月
- (2) 渋川玄耳『日本神典 古事記噺』(誠文堂 一九二〇〔大正九〕年八月)は、前掲書より早く、書名に『古事記』を冠しているが、再話の中に「国引」と題して、『出雲国風土記』意宇郡条の地名起源説話を含んでいる。「明治四十三年八月」と記された「はしがき」には、
- 『本書』は、古事記中の説話の殆ど全部を取って平易なる口語に訳し、且つ日本書紀以下の古書を参酌し、又た著者の意匠を持って多少の潤色を加えたり。
- とある。「明治四十三年の秋 東京にて」と記された「くりごと」には、
- 此書は主として『古事記』に依つたので、『古事記』の肝要な話は殆ど此に尽きて居る。処々に『日本書紀』『古風土記』などに依つて増減した所もあるが、子供相手の本だから、一々出処も示さず、取捨の理由も挙げない。
- と、他の文献を組み合わせたことが記されている。
- (3) ①大木雄二『日本神話』金の星社 一九三八年〔昭和十三〕十月
- ②大木雄二『世界名作童話全集第三二巻』『日本神話 いなばの白うさぎ』講談社 一九五一年〔昭和二十六〕十二月。
- ③鴨下晁湖絵 大木雄二文 講談社の絵本『いなばの白兔』大日本雄弁会講談社 一九五四年〔昭和二十九〕八月。
- (4) 林房雄『古事記物語』『日本編2 日本古典文学集』29 創元社一

九五五年〔昭和三十〕二月

- (5) 楠山正雄については、楠山三香男編『楠山正雄の戦中・戦後日記―辞典編集・演劇・童話の仕事―』(二〇〇二年〔平成十四〕四月 富山房)と楠山三香男編『楠山正雄の戦中・戦後日記 追補―文芸の志 明治・大正と磨き昭和に結ぶ―』(二〇一〇年〔平成二十二〕八月 富山房)が詳しい。
- (6) ④は、楠山三香男「『日本の神話と十大昔話』と『日本童話宝玉集』」に、
- この講談社学術文庫は、主に『日本童話宝玉集』上下本によつたが、巨人版など、その後の改訂本も参考にして再編集した。大正期に独特な企画を世に問い、その後も修正を重ねた編者の意図を汲んでのことである。
- とある。本稿ではもとになる①②③を考察の対象にしている。引用するに当たっては、漢字表記等は現在の字体等に改めていることを付記しておく。
- (7) 『日本神話英雄譚宝玉集』第一冊 天の浮橋 富山房 一九四二年〔昭和十七〕七月 本書の閲覧には、国立国会図書館のデジタルコレクションを利用した。
- (8) 同時代の傾向を、大木雄二前掲注(3)①に認めることができる。
- (9) 大木雄二前掲注(3)②及び林房雄前掲注(4)に、その一例を確認することができる。
- 本稿で使用した『古事記』『日本書紀』『風土記』は、いずれも小学館の新編日本古典文学全集をテキストにしている。